

里見八犬傳

第二輯
卷一

13
3416
6





文化丁丑孟春刊行

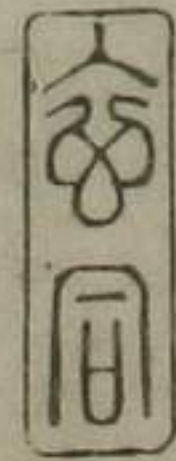
曲亭馬琴著 柳川重信畫



音圖八犬 傳集式轉

山青堂藏刻

八犬士傳第二輯自序



稗官新奇之談嘗含畜作者宵臆初
攷索種々因果無一獲焉則茫乎不
知心之所適譬如泛扁舟以濟中蒼海
既而得意則栩栩然獨自樂視人之
所未見識人之所未知而治亂得失
莫不敢載焉世態情致莫不敢寫焉

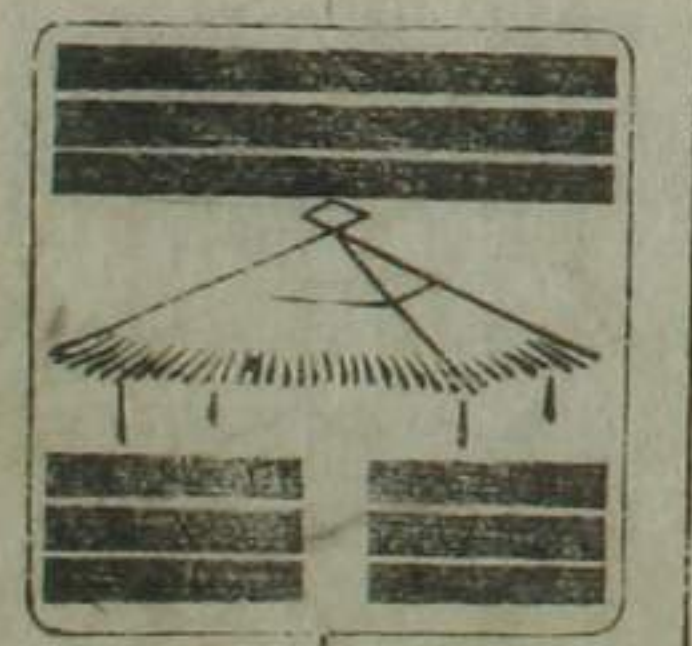
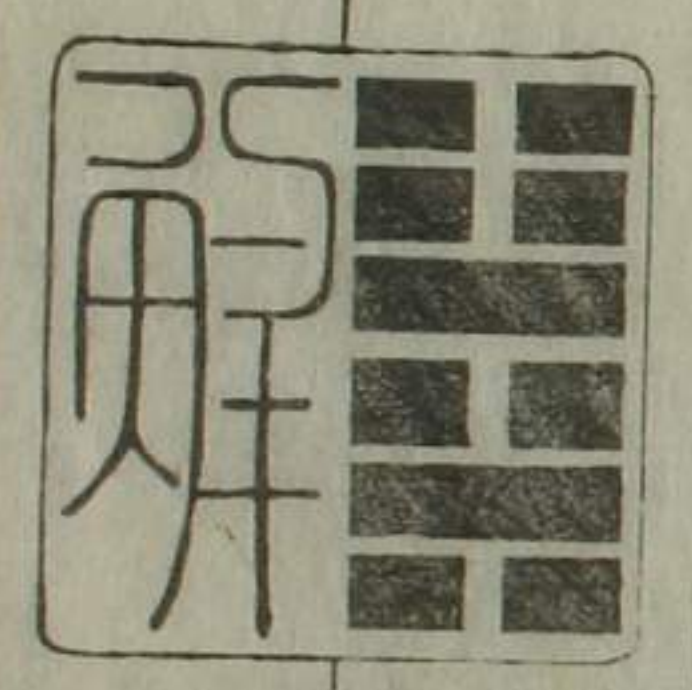
排纂稍久。卒成冊。猶彼船人。漂泊數千里。至一海島。邂逅不死之人。學仙得貨。歸來告之于人間也。然如乘槎桃源故事。衆人不信之。當時以爲浪說。唯好事者喜之。不敢問其虛實。傳迨數百年。則文人詩客風詠之後。人亦復吟哦而不疑。嗚乎。書也者。寔不可信。而信與不信。有之。自國史絕筆。小說野乘出焉。不啻五車而已。屋下加屋。當今最爲盛。而其言詖諧。甘如飴。蜜是以讀者終日而不足。秉燭猶無飽焉。然益於其好者。幾稀矣。又與夫煙草能醉人。竟無充飲食藥餌者。無以異也。嗚乎。書也者。寔不可信。而

信與不信有之。信言不美，可以警後；學美言不信，可以娛婦幼。儻由正史以評稗史，乃圓器方底而已。雖俗子固知其難合，苟不與史合者，誰能信之？既已不信，猶且讀之，雖好亦何咎焉？予每歲所著小說，皆以此意。頃八犬士傳嗣次及刻成，書賈復乞序辭。

於其編因述此事以塞責云

文化十三年丙子仲秋閏月望抽毫於著作堂南牕木樺花蔭

簑笠陳人解識



南總里見八犬傳第二輯摠目錄

卷之壹 第十一回

仙翁夢寐富山

負行暗獻靈書

同卷 第十二回

富山洞畜生發菩提心
竹流水神童說未來果

卷之貳 第十三回

遺尺素因果自訟
拂雲霧妖孽肇休

同卷 第十四回

飛轎使妾涉溪澗
鳴錫、大索記總

卷之參 第十五回

金蓮寺番作擊雙
拈華庵手束留客

同卷 第十六回

白刃下鸞鳳結良緣
天女廟夫妻祈子

卷之肆 第十七回

逞妬忌墓六求螟蛉
固孝心信乃襖曝布

同卷 第十八回

川原紀二郎隕命
莊官舍與四郎被疵

卷之伍 第十九回

龜蓀姦計賺糠助
番作遠謀托孤兒

同卷 第二十四回

一雙玉兒結義
三尺童子述志

統計二十四回其第一回迄第十回既錄于肇輯第一卷



突野加太郎

板野井弁

あつちの月
あつちの月
あつちの月

濱路

卷舒在手雖無定
用舎由人却有切

三保谷の
あつちの
風ふると
あつちの
あつちの



柳枝左文郎

土田土太郎

八代信二軒巻一

渠を富山へ入りしと終てその安否をたゞせの世のあえ人の幾忘る隙を
 うたふとくふいと悔くを思召と然とてさよも出り多るぞ彼溪洞と路絶く
 つか方ざるののめはとて親も一切あらせざるとり樵夫獨人ふんを
 正のあつもせ親胞兄也と遭入りりハハ不は悔く恥く死するえいと
 思ひ多るも累の國中に殉るく九良賤士庶をりり山嶽をりり
 との件に山ふ登ると瓜許とてどりとの旨み背くのの心首と列んと
 捉させもふも亦生憎めあさるゆるみとろ又おるりの金碗大捕存徳
 うる。渠へ安西景連と兵糧を借んとく苟ふおとゆれしより今ふそのな亡
 志とて謀れて擒とるるが果敢とて命取置けんとて陣設えつる
 うる。功ありうらぐ賞瓜辞一腹切と亡とるけ親孝吉を林ぬめあを
 末期と誓ひいとあまぶつをその子に城の主もせん女婿めをせん
 思ひもよふ化ありた。まさせぬりの八人の人盈まば虧る月をうても去歳は
 今年もつらむと。あつ果る渠ホのこふらとてんとてりふ人は同へさ
 るるのな子と迷ふ親の常闇へこころ照てよのあく。却り物なをひ
 多し現百万騎の敵とてんも肩とせりけ。智仁勇の三徳を兼ぬゆへ
 大将とて又今さらふ術あり。ゆきまでひ屈る人バ況義実の夫人五十
 子にその月その日伏姫と別とてこれの面影のこ只目ふそひて泣く。泣
 明し多し。渠恙ろくあらせり来る日ふあらせると神は佛ふりく遍る。
 うち合さる。堂も指も細りく朝夕の著しとるも懶け小疇勝もさませ
 るのひバ臂ちり小使る。専女房り共とちん理とやうとのこそ及慰人
 よもある。おのく心鬼うく。富山の奥ふこけ登る姫えのおん所在を
 遂はさる。うらむとてやんと志のびくは相譚ひつ行者の石窟へ代糸とのひ

八犬傳二卷

十

何とまらぬとも。ひくまで不瘦脱ひく。返すぬ旅又逝水のるからむべくハ信らぬ
 病こづらふハ唯ゆゑるらん。そのまうさひも精くまらぬ。うや蓬菜不死
 の樹不老の葉も何とせん。ともひくても現身の生のうちうらむひでふ。あふと
 こと伏姫今下こびのあふうあぶ。こふがための仙丹身方と直すま
 たるまあもなうもど。や此まうさへ依るや。婦女の愚癡ぞ僻るむと論
 くもの人。あふと。國の爲親のこめ。力を費ふく。家犬は伴はつ足
 曳の山路を指く入う。姫が儻稀なる心操と類罕なる因果を。とわりの捐
 させのひろが民よの仁義の君なりとも。子ゆを不慈たの親とまら。こ人
 いと憚あこらう。國は信を喪つと。その子を棄させ。あとも富山由君
 知。めと四の郡の内さく。や。こが年々。月毎は安否を問せ。みづらむ。いぢれて
 入り。こら。まもせ。送は憂苦を懸。こら。こら。ともう。と。ゆらん。推夫山成

燒牧童ホまが。伴のよ。入る。禁め。あふ。こら。や。齋忌。き。魔
 所。とも。誠を推せ。親なり。子なり。國の守る威徳の。今。は。姫を
 恙なく。彼山。あふ。や。や。あふ。思召る。難く。と。あふ。ゆ。所。ゆ
 る。こ。あひ。た。せ。ま。ら。む。や。是。の。今。般。の。形。ひ。は。つ。ら。と。恨。ら。り。
 勸解つ。せ。ら。死。息。吹。あ。む。あ。口。鏡。と。て。義。実。ハ。黙。然。と。頭。を。擡。り。ん
 る。所。道。理。る。縁。故。を。推。せ。ら。こ。が。一。言。の。失。り。子。を。棄。恥。を。送。ら。り。
 あん。才。み。ま。ら。こ。ら。こ。ら。朽。き。く。あ。ら。ん。人。木。石。は。あ。ら。ん。恩。愛。の
 絆。あ。こ。ら。執。着。の。羈。釋。易。く。と。意。の。駒。の。ね。ら。あ。め。く。あ。ら。煩。惱。乃
 犬。を。逐。つ。公。道。と。え。果。く。侮。と。浸。ま。り。の。あ。ら。本。別。再。び。乱。は。し。と。懼。ひ。て
 情。と。剖。欲。を。禁。め。て。こ。ら。こ。ら。山。見。ホ。や。ら。く。彼。山。は。登。る。と。狐。聴。ざ。り。こ。ら。姫。が
 る。恥。恥。掩。ひ。愛。は。潮。と。こ。法。を。枉。則。を。踰。る。こ。ら。こ。ら。を。民。よ。あ。ら。せ。ん

山見ホやらく彼山は登ると狐聴ざりこら姫が

駿をと死に
去きくま負ま
白まきま龍り
乃な能の田の
小こ赴ま
赴まく



堀ちり直せ

この画の解
第十六張の
背よ見え
さう

あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を
あつたことども。あんが歎き不便なり。退き思慮をめぐり。姫が安否を

和敷うらたへ血氣の勇力と智ある人へ事不膽でかまはく謀を好むといふや。父
 母をまこととて遠く遊びて況危き不近くをわが子とて多くあはぬ和敷の家乃
 柱石のつゆ漫く早くと過失あはれなき不孝なるべし。とて吾も亦崇を
 おそまはくわらざるやあはれど生涯あつて見せしとて別まへ姫八玉匣のあ
 ぬとせのけりよゆきまらるるこころに紡せんとなし獲た野ゆる且つ宵くる
 りくあふう。さうとて今宵に限るころ再びあひあはれまもあつたんこの侍女
 們中もあはれゆきとて外へ渡させのひそと輪く許し多のひび成へ又さうゆ
 ちうとて言ふあもまき豊りく退出るも義実へそがあふ臥房あはせし
 とも。寝とぬまふ。とせま。ゆやせま。と多ひひてとや曉くはるり比
 ともえとむむ角へ口印る。富山の奥の溪洞のあつたの岸に在る當下敷ハ
 八十あまり百はちちき一個の老翁おん背後より来りたる。義実よりさか
 みの山あつて入らせり。おん郷導仕人さうとての川へこぼし。右のめりく推
 まがゆふ一條の細道あり。去歳よりまゝこの山の掬を禁ぬせしとて。荆棘
 いやがらふ小鷲茂りく。何処か路徑ともころろ。おん僕既は枝を折るけ。或ハ草と
 ぬるどく。葉をてゆへ。其知よりおん供仕らむとも迷せのへうもあはれ
 本意を遂めり。彼方より進せのへと指し海ありとる。義実へ不思議のふ
 ちひく。その名を問んとまのふ。忽地と覚えて。是華胥國の一夢かおひ
 ね。おめこの。寐の夢。憑む足とと。さうとて。おん意ふとめり。この朝も此彼と民の祈を
 聴定め。やうや。裡面に入りあつた。土ま由未と近うと。浩如と一個の近臣。廊の
 上。おんあひりて。額を著。堀内。おん召小意。とて。東條より。上せり。とや
 上。おん義実へ。眉をら。下をせ。既を傾け。とて。貞妙をよび。とて。五十子
 病著を。乃。ゆ。と。み。つ。と。あ。け。ん。そ。と。ち。れ。ゆ。も。あ。は。れ。こ。と。も。向。入。と。あ。は。れ。と。あり。

和敷うらたへ血氣の勇力と智ある人へ事不膽でかまはく謀を好むといふや。父
 母をまこととて遠く遊びて況危き不近くをわが子とて多くあはぬ和敷の家乃
 柱石のつゆ漫く早くと過失あはれなき不孝なるべし。とて吾も亦崇を
 おそまはくわらざるやあはれど生涯あつて見せしとて別まへ姫八玉匣のあ
 ぬとせのけりよゆきまらるるこころに紡せんとなし獲た野ゆる且つ宵くる
 りくあふう。さうとて今宵に限るころ再びあひあはれまもあつたんこの侍女
 們中もあはれゆきとて外へ渡させのひそと輪く許し多のひび成へ又さうゆ
 ちうとて言ふあもまき豊りく退出るも義実へそがあふ臥房あはせし
 とも。寝とぬまふ。とせま。ゆやせま。と多ひひてとや曉くはるり比
 ともえとむむ角へ口印る。富山の奥の溪洞のあつたの岸に在る當下敷ハ
 八十あまり百はちちき一個の老翁おん背後より来りたる。義実よりさか
 みの山あつて入らせり。おん郷導仕人さうとての川へこぼし。右のめりく推
 まがゆふ一條の細道あり。去歳よりまゝこの山の掬を禁ぬせしとて。荆棘
 いやがらふ小鷲茂りく。何処か路徑ともころろ。おん僕既は枝を折るけ。或ハ草と
 ぬるどく。葉をてゆへ。其知よりおん供仕らむとも迷せのへうもあはれ
 本意を遂めり。彼方より進せのへと指し海ありとる。義実へ不思議のふ
 ちひく。その名を問んとまのふ。忽地と覚えて。是華胥國の一夢かおひ
 ね。おめこの。寐の夢。憑む足とと。さうとて。おん意ふとめり。この朝も此彼と民の祈を
 聴定め。やうや。裡面に入りあつた。土ま由未と近うと。浩如と一個の近臣。廊の
 上。おんあひりて。額を著。堀内。おん召小意。とて。東條より。上せり。とや
 上。おん義実へ。眉をら。下をせ。既を傾け。とて。貞妙をよび。とて。五十子
 病著を。乃。ゆ。と。み。つ。と。あ。け。ん。そ。と。ち。れ。ゆ。も。あ。は。れ。こ。と。も。向。入。と。あ。は。れ。と。あり。

見仕る小翁が口状も符合さるる且又あつるもの疑ふところ件の小翁を久まて
 きて馬に鞍あはせりも乗る。後者のつく瓜俣を夜をま先途をいそぐく
 神館よりあつてうけらるる且又縛みる案は相違せり。原末徳翁を癖者小
 極むるといへともやどくも先神教書へあふあふと色商せと懐中より
 どう出く返くは自ら養実とくとうち披きこむふいと負ゆが方ふ引
 向くつせり六負ゆ再びうち驚き現某がさのみんく文字あふふむとらも
 うく如是畜生獲菩提心と二行八字は變ぜり身入奇あり。とするも呆
 ると半响あやう又いふすもあつるけり。養実への一句は忽地曉りて巻あこえ
 飛人汝がまうき所偽らるる不思議のこえ抑さのみ使者と稱してこの書と違
 とせし翁が年齢その面影はつるまは輝は告ぐとと室へ負ゆ着る気色もく

件の小翁八十あり。百とせゆも及べし眉長うく綿花を重うく歯と皓して
 執杖を連たる小異るる。弱へ瘦くとも健へ老くともんまいと弱り。眼光
 人を射て威あはとも猛くさびよふり道顔仙骨と果るべし。とさうとあぞ
 義実ハあつても。堂の丁と拍。あつても似る奇終あり。その疑ふべしあつて
 洲崎の崖小迹垂るる役行者の示現。且ためめより告んとて夫人は諾ひぬ。
 伏姫の安否を訊あつる。又養成の孝心勇氣あつるとく人養又富山の
 奥のあつて岸は遊びく。あつても小翁は遭一縛の越首尾を脱る。あつて
 五臓の疲労は成る頼む不足とびと多ひ。口今汝がわう一つ。翁の面影か
 養ふ。あつてつめのと紡織。加海如是畜生云々の八字とつて過去未来を
 示す。伏姫禱る。とて病もく。嗚音とえぬ。あつても洲崎の崖は役
 行者の利益より。後健は生育あつて。折は感得せ。水晶の念珠も仁



靈書
之主
疑心
解後
感

如是
發善
提心
生

貞心

八代傳二轉卷一

十九

第十二回

富山の洞は畜生菩提心を發せ
流水は清く神童未來果を鏡く

元常の響あまとも飽きそむきと好むのの後朝の別は瓜惜むが故は只
とどろくも誓と憎し沙羅雙樹の花のよに盛者必衰の理り瓜頭せとも
徒小香を愛するの風雨の過えんとを妬むが故は偏は延年の春を契たり
觀むと夢の世親せざるも亦夏の世は孰く幻るるざりける思ひ内ふある
りの龍華の三會は値ふといふも凡夫出離の直路を去るも覺て復
悟るの虎穴龍潭ふ在りとといふも瑜伽成就の快樂も又も私をふ
世を思ひ捨く富山の奥は二とせみ春と秋と送るる扱も里見治部
大輔義實のちん息女伏姫の親の爲又圓の爲は言の信を惣民は失りせと

身を捨く八房の犬は伴は山道を指く入日成隱世後入訪む山岸の植生と
山川の挾山の洞は眞菅敷臥房定めり冬籠り春去来ま朝鳥の友やふ
頃へ八重霞高峯の花と見たりり弥生八里の雛遊び垂髪少女が水鴨
成二人双居今朝を摘む名もろろき母子草誰搦そあり二の日の餅は
あまね菱形の尻拭石も唐土もく稍暖た苔衣脱ええ後とも夏乃は夜
袂涼は松風は揺らりと夕立の雨は洗ふく乾き髪蓬が下は鳴虫乃
秋とるるまぶさこ小谷のりも葉織映し錦の床も假寐の宿とまるとや
鹿ぞ鳴く水澤の時雨霽回るき果は其如とも雪ふ岩が枕角とれて
真木も正木も花ぞこ四時の眺望はありるるごとくびく處は鹿自物
藤折布と外は立かど後の世の爲とまるとふ経文続編書写の功日数続
且はうれるも憂ふ馴つて憂いとせよ浮世のりはゆめを乃音響の

声えよ。一念希求の友となる心操。殊勝の道。是より先八房の伏姫を
脊小乗。この山に入りと見。廣く流水を帯り。山峽は洞あり。石門
おのづから鑿り。彫るごとく。松柏西北。後身と牆をるせり。この洞南面
をて。その裡も亦。間々。犬のうら。住り。前足折て伏。それ。姫。入。その
意。を。時。り。徐。を。り。立。て。ん。み。昔。も。住。り。人。や。あ。る。え。裡。も。あ。離
る。圓。坐。と。梵。捨。る。灰。を。り。小。殘。り。世。を。捨。つ。世。を。捨。つ。世。の。山。は。山
ご。り。ま。ら。り。の。こ。が。身。に。ま。ら。り。あ。ら。う。と。と。り。ご。ら。く。進。入。り。そ。が。後。小
坐。を。占。め。六。大。の。姫。の。傍。に。ま。ら。り。滝。田。の。館。を。出。る。と。見。法。華。經。八。軸。と。料。紙。硯。
力。を。放。さ。ず。此。れ。も。も。持。束。の。六。の。夜。は。月。下。小。続。経。と。お。け。つ。う。の。こ
明。の。み。彼。感。得。せ。り。水晶。の。珠。数。は。掛。く。今。る。海。鏡。も。あ。る。と。憑。む。呀。の。神。佛。乃
擁。護。の。ま。の。言。語。を。大。く。う。ま。と。せ。う。た。れ。つ。ん。と。多。と。も。の。こ。の。言。生。は。れ。を

賺。く。深。山。の。奥。へ。伴。ひ。ま。ら。り。飲。さ。ず。と。も。情。欲。の。不。免。は。幾。分。と。あ。ら。う。遂。に
そ。の。免。の。誓。ひ。を。忘。れ。入。姪。心。を。披。く。こ。が。身。小。近。づ。と。あ。ら。う。主。を。欺。く。罪
業。も。あ。り。只。下。刀。小。刺。殺。ま。と。思。ひ。決。て。あ。ら。う。ち。騒。ぐ。胸。を。鎮。て。潜。せ。身
刀。の。袋。の。緒。を。解。捨。る。右。足。引。著。く。又。続。経。と。ま。ら。り。あ。ら。う。の。氣。を。さ。ま
知。り。け。ん。八。房。へ。近。く。も。ゆ。り。と。ど。只。物。と。姫。の。顔。を。取。り。又。起。り。又。起。り。又。起。り。
舌。を。吐。き。流。し。或。は。毛。を。舐。り。鼻。を。舐。り。只。喘。ぐ。と。頻。り。あ。ら。う。の。つ。つ。あ。く
明。く。その。旦。八。房。へ。と。起。て。谷。に。下。り。木。果。蔽。根。と。來。て。銜。め。て。來。て。姫。君。を。ぞ
や。ら。う。ま。ら。り。佳。地。と。ま。ら。り。一。日。も。懈。ら。ず。け。ん。と。暮。し。翌。と。明。く。百。日。あ。ら。う。終。る
後。八。房。へ。い。つ。と。と。り。続。経。の。言。を。耳。を。傾。け。心。を。澄。せ。ら。う。の。と。ど。復。姫。と。と
眷。ら。う。伏。姫。の。ひ。も。あ。ら。う。彼。因。寺。の。牛。仏。に。載。り。榮。花。物。語。峯。の。月。乃
卷。に。在。り。い。つ。ん。や。又。大。の。梵。音。を。放。つ。古。れ。草。紙。に。敷。ん。め。り。佛。の

慈悲の穢土穢物を掃ひらるるごとく。天飛ぶ鳥。地走る獸。草葉小取。長く
 虫江河の鱗ぬやうく。悉皆成佛せざるごとく。今この犬が欲と忘れて。流
 經の音と聴く。如く入歸の友とるる。皆おん經の威力ふよまり。併
 釋た時。吾侪のよとせを示させおひく。役行者の眞助より。と最悉く
 そひとりて。流經を怠るるを。早まの珠数を。おし揉く。逢ふ
 洲崎の方。祈念し。又あると。父母のおん為。經の偈文を。騰字し。く
 前ある山川。お流し。春花を。折く。佛の向なり。秋入る。月小唄。坐す
 西天を。窓めり。さよ山果。懸る。朝三の食。秋風。飽き。柴火。爐。宿りて
 夜薄の衣。寒。乳。防ぐ。反歩。山嶮。けし。も。蔽を。首陽。折る。の。怒。なく。
 岩窓。小梅。遅けし。も。嫁。胡語を。居。の。悲。とる。姫。へ。年。二十。小満。を
 容顏。固より。玉を。欺く。巫山の。神女。が。雲。と。る。夢。の。面影。を。苗。小野

小町が。花。比。歌。の。風情。を。残。せり。金屋の内。雞。障の下。小養。と。ひ。日。八更。おも
 いふ。今。山。居。久。衣。裳。垢。つ。破。と。れ。ど。肌。膚。も。残。雪。より
 皓く。雲。鬢。梳。ゆ。由。る。と。も。緑。鬢。春。花。より。芳。く。細。腰。い。く。瘦。て。風。は
 堪。さ。る。柳。の。玉。指。も。細。り。と。色。は。惱。る。筆。小。似。り。その。素。性。を。ひ。ふ
 と。安。房。の。園。主。里。見。氏。の。嫡。女。と。心。操。と。論。へ。横。佩。の。お。息。女。中。將。姫
 ゆ。由。愧。と。は。草。書。又。續。書。と。お。父。の。才。を。禀。て。お。の。づ。理。長。小。怜。れ。判。縫。又
 管。絃。へ。母。君。の。お。習。せ。と。く。その。調。いと。妙。い。く。ま。で。愛。た。れ。未。通。女。ま。ま
 ち。の。月。下。公。翁。は。妬。ま。て。非。類。の。八。房。小。伴。と。し。小。流。ま。く。ち。の。里。お。見
 る。る。の。精。細。は。字。し。出。と。ま。は。筆。流。り。心。痛。了。當。時。の。光。景。想。像。は。
 心。程。ふ。その。年。へ。暮。る。岸。の。小。草。漸。萌。出。谷。の。樹。芽。由。翠。を。ま。ひ。比。有。一。日。伏
 姫。へ。硯。水。を。滴。入。と。出。て。石。滴。を。掬。む。は。横。支。せ。止。水。は。ろ。ろ。影。入。ん

多々。その體へ入ふ。頭へ正々。犬有りける。名ひうけねむり。小吐嗟と叫
びく。ちやと退る。又立ち。りて。え。その影。こ。異。る。こ。公の
悉ひ。り。け。可。惜。膽。つ。ぶ。ふ。け。と。と。ひ。え。い。の。名。号。を。唱。つ。こ。の。日。の。煙。文。と
書。写。し。あ。ふ。胸。膈。う。る。な。り。て。次。の。日。由。公。地。例。を。こ。の。比。より。又。月。水。珠
絶。て。る。と。ほ。月。日。中。や。累。ま。ふ。腹。張。ま。は。ば。あ。ち。脹。満。ま。ど。り。の。あ。や
あ。ん。ど。く。死。後。と。多。ひ。ふ。ふ。こ。も。う。て。春。暮。と。夏。過。と。い。と。悲。し。た。秋。ま。ど
う。の。と。ぬ。傳。と。去。年。の。こ。の。月。鹿。田。の。館。を。出。て。了。才。の。病。著。小。多。ひ。う。う。痛。く。只
痛。く。は。母。も。入。り。泣。つ。送。り。お。う。と。い。お。ん。面。影。の。目。小。添。く。忘。れ。入。と。ま。は。は。と
忘。れ。ま。ど。母。も。如。此。ぞ。と。い。ま。ま。ん。い。く。ぬ。と。か。く。も。多。ひ。つ。げ。多。ひ。細。く
病。づ。く。ひ。の。も。や。家。の。君。家。弟。長。成。と。ま。う。く。多。ひ。の。こ。お。は。國。お。ま
郡。小。在。る。と。里。遠。離。る。山。鷄。の。雌。雄。も。あ。ぬ。親。同。胞。峯。上。隔。て。影。影。と。い

る。よ。も。る。哀。別。離。苦。強。面。の。ハ。蜻。蛉。の。命。も。と。と。い。う。月。小。あ。ま。う。の。
百。竹。山。岩。小。額。が。り。笛。く。一。声。と。と。泣。き。且。く。目。を。拭。ひ。噫。行。て。る。愚。癡
う。う。と。棄。恩。入。無。為。報。恩。者。と。い。へ。脱。せ。る。う。う。恩。愛。別。離。の。う。う。と。い
不。二。要。門。の。意。樂。と。換。ん。や。う。う。う。う。う。親。の。あ。ん。あ。ん。と。い。う。と。い
ま。の。罪。あ。う。う。三。世。の。諸。佛。ゆ。り。せ。ま。八。房。の。求。食。の。ひ。て。や。嚮。小。出。て。い。ま。う。い
う。と。渠。も。あ。う。食。を。求。く。獲。ざ。ら。う。と。い。う。う。吾。侍。亦。佛。は。仕。侍。ま。う
忘。ん。や。露。も。は。そ。ほ。ら。比。る。う。う。深山。の。草。の。花。も。稀。り。う。う。多。向。ま。う。と。い
ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。と。重。や。ち。ち。ち。ち。ち。ち。流。水。と。と。と。と。綜。麻。形。の。林。が。と。と。の
菊。の。花。も。折。入。と。と。二。三。町。裳。濡。じ。う。進。む。の。浩。如。と。乾。る。重。山。の。根。方。と
當。り。う。笛。の。音。幽。と。ゆ。え。け。り。伏。姬。耳。を。側。く。あ。や。の。山。も。樵。夫。も。入。り。と
山。見。も。ほ。い。せ。と。い。う。の。知。ま。る。日。より。ま。の。ま。で。も。け。ん。と。い。う。人。は。あ。ん。と。い。う。は。多。ひ

草花を
 伏姫神
 童小あ



三傳二車卷一

廿六
 山青堂藏

三傳二車卷一

山青堂藏

審みは百事中らむとひふとほしけり。師の命孤直と。某狐採らんぬふ
 才なり。寔よこの山へ人の往還禁ぬる事ども。程まうさび昔のどく山押を許
 とほべ。師こそをさほゆふよ。某狐採らんぬとひ伏姫ゆて嘆息し。
 現二親のちん慈悲なかり。月日と共に照さぬ隈なり。身を撒さど潔く。
 かくてをるとも知る程。如此計りせぬひけん。さびごとく。こがたむとの故を
 りて。番崎輝武は溺死させ。樵夫幸雄は生活乃便著を喪とほの
 ろふと。旅ゆくりの足えは駐る罪あり。許させとまへ。といひかけてうち
 酸鼻多ひける。且しく又童子ふ對ひ。そのころ名盤は仕るといふ人の疾病を
 診るとも。さぞおとろびくあえむとえ。今試み小回せたりあり。吾侪と
 春の比より。幾く月水をも。胸うらみく煩く。月も小片あり。ありぬ。こ
 何といふ病症をえんと問せぬ。やうち微笑婦人。経行用塞く。後一兩月悪

心く酸死の狐好む俗よ。こは死要阻といふ。三四月小く。その腹既小大き。
 五个月小く。その子稍動くとあり。婦人あつく。こは狐志あり。こはら医同
 ちぞもろ。あし方ハ既懐妊しく。五六月小及び多り。何の疑ひあるぞ。こ
 り狐伏姫やあふ。やむるをいりのる。吾侪は良人へるたぞう。去
 歳のこの月この山へ入り。日よる人を入をこんむ。一念称名流経の外も。死
 られたのを。何よありて有身は。あま嗚呼。やと。ほりて。さびごとく。と笑ひ
 らへ。童子はうちん。冷笑ひる。あし方ハ夫なる人。既親より許され
 たる。八房のこ。何れぞ。結ば。姫の貌を改め。そのころ。只その初知。その
 後の。さぶさぶ。云々の故あり。二親も。禁め。あし方ハ。よふ。浅や。く。家犬と
 とも。み。つた。あ。幸小。方を。穢され。渠も。所
 ち。經を。聴く。と。飲。縦。澄。据。へ。う。と。ひ。と。も。こ。が。た。清。く。潔。く。神。丁。そ

